

fragile

取り扱い注意 新しい個人の誕生

1. 関係と所有

「これはぼくのものだ」というとき、ぼくはこれを所有している、という。その場合、もっていると所有の違いは3つある。

1つは希少性で、他のみんなはそのもの（あるいは、それに相当するもの）をもっていない、ということ。 2つめは、もっているものが他のみんなにある望ましさを抱かせるものでなければならない。それが魅力である。希少なものが魅力的である、これが希少性の価値ということである。

さらに所有は排他的だ、ということが大切である。ぼくがあるものをもっているとき、そこでは、他のみんなは「それは僕のものだ」とはいえないというルール1と、ぼくは「それ以外のものには、それはぼくのものだ」とはいわないというルール2についての社会的な合意が形成されていなければならない。この2つのルールのもとで、希少な価値あるものをもっているとき、所有が社会的な関係のなかで成立するのだ。これが近代産業社会を支える所有の考え方である。

fragile

取り扱い注意 新しい個人の誕生

2. アイデンティティと所有

「ぼくってなーに？」と自問するとき、青春の悩みが始まるらしい。どの時代でもそうだ、というのではなく、これは近代人（厳密には男性の大人に限定されているので、フェミニズムからすれば、怒りの対象なのだが）になるための通過儀礼である。これがアイデンティティである。だから青春の悩みはアイデンティティ・クライシスといわれる。

アイデンティティの確立とは、外部状況に一方的に左右されることなく、自己の明確な境界を形成して自立的な意思決定ができることである。そのとき、自己が何を所有しているか、がその人の意思決定の力を決める。所有するものが価値をもたないかぎり、その人の自立性は損なわれ、アイデンティティの確立ができない、ということである。したがって貨幣・権力・知識（情報）などのような一般性の高い「メディア」をより多く所有するとき、強い個人（アイデンティティ）が成立する。

この個人の強さの証明は基本的には社会的関係のなかで確認されるものだから、その「メディア」をいかに所有するか、が問題になる。所有する貨幣や知識を交換して経済的関係を維持したり、所有する権力や知識を行使して政治的関係を維持するのである。これが近代社会であり、その基本は所有された財を相互に交換し伝達することである。

fragile

取り扱い注意 新しい個人の誕生

3. 所有するモダンと共有するネットワーク

情報はそもそも所有されるものなのか。ここで、所有にかんして、もう1つのことが重要になる。財の減少性という問題である。所有が社会的な関係を生成するとしたら、所有する財が交換なりで相手に移行した場合には、その移行された財は元の所有者の手元にはない、ということが重要である。情報も、その経済的な価値でみるかぎり、減少する。同じ話をして、報償はもらえない、ということである。しかし情報は、その本来的な特性としては、減少しない。話をしたからといって、その内容が話し手の記憶から消去されることはない。情報は基本的には減少しないで、どんどん共有される特性をもつ。しかも情報は伝達されないと情報の価値は維持できない。所有しているだけでは、情報は価値をもたない。

とすると、近代社会とネットワーク社会との差異が、ここから予想される。いままでの社会は所有を基本にした社会だから、情報も経済的な価値の視点からのみ評価されたにすぎない。しかしこれからのネットワーク社会は情報共有を前提に構成される。情報共有をもとに社会関係が形成されると、そこでのコミュニケーションの形態は、情報を伝達する送り手・受け手の図式ではなく、情報を相互に支援する形態になる。それがメタファーとしてのボランティアである。インターネットでホームページをつくってみればわかるように、そこでは情報発信はない。リンクをはって、自分のページを作成しているのだから、自分はネットワークに支えられてはじめて存在している、ということになる。だからみんなに支援されて自分があるのだ。情報共有されたネットワークの世界では、だから、誰もみんなネットワークに依存する弱い自分なのだ。ここには主体性などは、いない。アイデンティティという自立する自分は、情報所有をもとにみんなに情報発信するから、ここではうるさい邪魔な存在にすぎない。その邪魔の最後がマスメディアという巨人だったのである。

fragile

取り扱い注意 新しい個人の誕生

4. ネチズンの正体ーフラジャイルな個人

ネットワーク社会では、もうアイデンティティはいらない。もっと柔らかに、もっとしなやかにネットワーク環境に融合したり共振しえる個人が期待されるのだ。自立する個人を強い個と呼ばば、これはあきらかに弱い個である。しかし弱いということは、強いことではない、ということではない。松岡正剛がいうように、弱いとは、ピアノシモのことだ。それは、フォルテと同じ主張なのであって、強いー弱いという上下関係ではない。

このような弱い個を、ここでは「フラジャイルな個」と呼ぶ。これがネチズンの正体なのだ。シチズンが所有する財をもとに交換する関係に入る強い個であるのにたいして、ネチズンは自分に欠落した情報を支援してもらい（ネットワークに探索する）、他のみんなに自分の情報で支援する（ネットワークに奉仕する）弱い個なのだ。つながることでは自分の存在が確認できないし、ネットワークに融合し共振することでしか自分らしさの表現ができないことが、ネチズンの「らしさ」なのである。

フラジャイルな個人は、もはや強くて固定的な自分の境界を維持しようとはしない。ネットワークのなかで自分を見つけるから、自分は世界の隅々まで自由に拡散する。自分の境界はネットワークの世界にまで拡がりうるから、その時々で、いろいろの自分になる。自分の境界はいつも変容し、多様な顔がそこにはみえる。 ker@sfc.keio.ac.jp そがネチズンの実体である。これが本物の新しい自分の名前である。国家の境界に保護され、親族内だけでしか差別化できない、本名という自分を証明する名前は、シチズンとしては本物の名前なのだろうけれど、ネットワーク社会での名前ではない。ネチズンはもっと柔らかでしなやかな自分である。